おはようございます！明日三月十一日は、成績整理日なので君たちはお休みですね。先生たちは大忙し。成績の整理や面談の準備、通知表の文章（所見）を書くなどの仕事が待っています。

今から十四年前の三月十一日もちょうど成績整理日で、立教小学生はお休みでした。

この日、つまり二〇一一年の三月十一日、午後二時四十六分、「東日本大震災」という大きな地震が起きました。

どの位の大きさかというと「震度七」。東北地方では最大四十メートルという津波（十三階建ての建物以上の高さ）が襲ってきた所もあり、二万二千人を超える人が亡くなりました。東京もかなりの揺れで、池袋校舎の体育館もグラグラ、ユラユラ、フニャフニャ揺れて、体育館があんな動きをするのを初めて見たという先生もいらっしゃいました。

二〇二三年三月十一日の読売新聞オンラインに、とても印象に残る記事が出ていたので、今日はそれを紹介します。

震災当時は二年生だった宮城県の小野望美さん。震災から五日後、無念なことに自宅近くでお母さんの遺体が発見されました。

震災から半年後の九月下旬、親せきの家で暮らす望美さんに手紙が届きました。丸みを帯びた見慣れたお母さんの字。間違いなくお母さんからの手紙です。

亡くなったはずのお母さんからのお手紙！さぞかしびっくりしたでしょう。こんな不思議があるのですね。

実を言うと、望美さんが一年生入学の時に、お母さんが内緒でランドセルメーカーの企画に応募して、「一〇〇〇日後に届く手紙」を書いていたのだそうです。それが三年生になった望美さんのもとに届いたという訳なのです。

その手紙の内容の一部を書き出すと、

（このてがみがとどいたとき、のぞみはどんなこどもになっているでしょうか？）

（三年生になった今は、すこしは、おうちのてつだいをしてくれているでしょうか？）

（このてがみをみんなでよんでいるところをたのしみにして、これからおかあさんはがんばっていきます。）

というような内容だったそうです。

君たちのお父様やお母様も、君たちが「神様に喜ばれる子ども」になれるように、そして、登下校時に危険な目に遭いませんようにと、毎日心の底から祈ってくださっていると思います。

心の底から思われ、祈られている君たちが、心の底から人のために祈れる人になってくれたなら、こんなにうれしいことはありません。

立教小学校では震災の翌年から、三月十一日の午後二時四十六分になるとチャペルのベルを鳴らしてきました。東日本大震災に遭われたすべての方に、一日でも早く心の平安が訪れますように、ベルの音よ東北に届け！という祈りを込めてベルを鳴らし続けてきました。昨年の三月十一日まではそれができましたが、今年は新校舎建設の途中で、チャペルは残っていますが「休眠中」。ベルが鳴らせません…。

明日、学校はお休みで、皆さんそれぞれの場所で過ごすことになるでしょう。二時四十六分になったら、ベルを鳴らせない分、君たちが心を込めてお祈りをしてくださると有難いです。

望美さんのお母さんが子どもを思い、祈る気持ちが生み出した不思議。心の底から人のことを思い、祈ることによって「奇跡」のような出来事が実際に起こるものなのですね。

（立教小学校校長　田代　正行）